

モーツァルト室内管弦楽団 第177回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester/ 177.Regulärkonzert

〈華麗なるモーツァルトの二重協奏曲〉

2017年7月19日(水)午後2時■いずみホール

Mittwoch, 19. Juli, 2017 14Uhr Izumi Hall Osaka

- 主催:NPO法人モーツァルト室内管弦楽団 <http://www.moz-kam.org>
- 協賛:いずみホール〔一般財団法人 住友生命福祉文化財団〕
- マネジメント:大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

*本年1月モーツァルト室内管弦楽団はNPO法人となりました。



モーツァルト室内管弦楽団 第177回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester Japan / 177.Regulärkonzert

2017年7月19日(水)午後2時●いずみホール

Mittwoch, 19. Juli, 2017 14Uhr Izumi Hall Osaka

〈華麗なるモーツァルトの二重協奏曲〉

モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart

(1756-1791)

歌劇《バスティアンとバスティエンヌ》K.50によるシンフォニア ト長調(門 良一編曲)

Sinfonia G-dur nach der Oper „Bastien und Bastienne“ KV50 (Arrangiert von R. Kado)

Allegro — Andante un poco Adagio — Allegro

フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K.299*

Konzert C-dur für Flöte, Harfe und Orchester KV299*

I . Allegro

II . Andantino

III . Rondeau : Allegro

* * *

2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ ハ長調 K.190**

Concertone C-dur für zwei Violinen und Orchester KV190**

I . Allegro spiritoso

II . Andantino grazioso

III . Tempo di Menuetto : Vivace

交響曲 第29番 イ長調 K.201

Sinfonie Nr.29 A-dur KV201

I . Allegro moderato

II . Andante

III . Menuetto

IV . Allegro con spirito

フルート：大江 浩志* / Flöte: Hiroshi Oe*

ハープ：石井 理子* / Michiko Ishii*

ヴァイオリン：ギオルギ・バブアゼ**、チブリアン・マリネスク** / Violinen: George Babuadze**, Ciprian Marinescu**

オーボエ：戸田めぐみ** / Oboe: Megumi Toda**

チェロ：石 豊久** / Violoncello: Toyohisa Ishi**

コンサートマスター：釋 伸司 / Konzertmeister: Shinji Shaku

指揮：門 良一 / Dirigent: Ryoichi Kado

■《バ스티アンとバスティエヌ》K.50によるシンフォニア ト長調

《バスティアンとバスティエヌ》はモーツァルトが11、2歳で作曲した彼の3番目のオペラであるが、そのあらすじは、村娘バスティエヌが最近恋人のバスティアンが冷たいので魔法使いに相談すると、逆に相手を邪険に扱えと忠告され、その通りにしてめでたしめでたしとなるという他愛のないもので、物語の起源はジャン・ジャック・ルソーに発すると言われる。オペラの序奏部(Intrada)はベートーヴェンの《英雄交響曲》の第1楽章のテーマとそっくりなメロディが使われているのでよく知られているが、77小節しかなくて演奏時間も2分足らずで、しかもオペラの最初のバスティエヌのアリアに続くように終止しない形で終わっているのである。私はそのアリアとオペラの終曲とをオーケストラ用にアレンジして全体を3楽章のシンフォニアの形にし、演目として取り上げやすいようにした。これまでもこの形で何回か演奏している。

■フルートとハーブのための協奏曲 ハ長調 K.299

1778年(モーツァルト22歳)、いわゆる「マンハイム・パリ旅行」の途次においてパリで作曲されたこの傑作は、フルートとハーブというまさにパリ好みの楽器の組み合わせのための豪華な協奏曲である。この作品はド・ギーヌ公爵というフルートをよくする貴族とハーブをたしなむその娘のためのものであった。この数年前に作られた5曲のヴァイオリン協奏曲やこのすぐ後に作られる2曲のフルート協奏曲に比べてスケールの大きい大曲であり、モーツァルトはこの注文に対して意欲を持ってのぞんだと推測できる。この協奏曲で注目すべきことはオーケストラのサウンドの豊かさである。ヴィオラは2部に分かれることが多く、それぞれが第1、第2ヴァイオリンのオクターブ下を受け持つことが多い。このやり方は本日の演奏会の次の演目、2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネですでに試みられているが、フルートとハーブというソロ楽器の華やかな音色との対比が考慮されているものであろう。このヴィオラの分奏(イタリア語でdivisiディヴィジという)はこの時代にあっては全くモーツァルトの独創というべきものであって、オーケストラの音色をより細やかに、かつ豊かにしており、彼の多くの作品で用いられている。フルートのソロ・パートは2曲のフルート協奏曲と比べて若干やさしく書かれているが、ハーブのパートはこの時代のハーブという楽器が改良される前のものであったので、現代の楽器で演奏することはかえって難しいようだ。この協奏曲には作曲者によるカデンツァはなく、19世紀ドイツの作曲家、ライネッケ(Carl Heinrich Reinecke, 1824-1910)によるものがあるが有名であり、本日の演奏でもそれが用いられる。

■2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ ハ長調 K.190

モーツァルト18歳の作品であるが、コンチェルトーネとは「大協奏曲」という意味で、複数の楽器のための協奏曲を意味する「協奏交響曲」と類似の概念と思われる。二つのヴァイオリン以外にオーケストラのオーボエやチェロにもソロ的なパッセージが少なからずあるなかなか面白い曲である。モーツァルトが本格的なヴァイオリン協奏曲を書く前にこんなスタイルの作品を書いたことは大変興味深い。オーケストラも上のフルートとハーブのための協奏曲のところでも述べたヴィオラの分奏が多く現れ、それがヴァイオリンのソロとからむところもあるなど変化に富んでいる。モーツァルトは4年後の「マンハイム・パリ旅行」にこの作品を持参しているが、マンハイムのオーケストラのメンバーから「この曲は全くパリ向きだ」と言われており、モーツァルトが辺境のザルツブルクにいながら大都会の流行を抜け目なく感じ取っていたことが窺われる。なおこの曲の第1楽章と第2楽章には作曲者自身によるカデンツァがあり、そこではソロの2つのヴァイオリンだけでなくオーボエとチェロも登場するのである。(なお、この曲では第1、3楽章においてオーケストラに2本のトランペットが書かれているが、指揮者の私の判断で本日の演奏においては割愛していることをお断りしておく)。

■交響曲 第29番 イ長調 K.201

上に述べた2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネより2ヶ月足らず前に作曲された、モーツァルト中期の大傑作交響曲。この時期の交響曲としてはト短調の第25番K.183も有名であるが、第25番はハイドンの「シュトルム・ウント・ドランク様式」の模倣であるのに対して、この交響曲は誰の模倣でもないモーツァルト独自のスタイルで貫かれた名曲である。交響曲でありながら室内楽的要素が強く、第1楽章の開始部などは特にその感が強い。典雅な雰囲気横溢した第1楽章、緻密な中にもびやかさに富む第2楽章、特徴的なリズムのメヌエット、爆発的なエネルギーに満ちた終楽章と、どれをとっても全くユニークな作品である。モーツァルトほどの天才であっても生涯のところで特に高揚した作品が現れるが、この曲はそうした例のひとつであろう。われわれも第1回の定期演奏会以来、演奏し続けている因縁の深い曲である。

♪コンサートレポート(モーツァルト室内管弦楽団第175回定期演奏会2017.4.8.) 横原千史(音楽学者・音楽評論家)

モーツァルト室内管弦楽団(MKJ)の「モーツァルトの室内楽とディヴェルティメント名曲集」と題するコンサートは、瀟洒で美しい天満教会で、演奏者と聴衆が間近に接するような親密な空気の中で行われた。これは2年前3月の同演目、同演奏者のアンコールで、モーツァルトの室内楽の指折りの傑作が素晴らしい演奏で披露された。

まずディヴェルティメント変ロ長調K137。ザルツブルグ・シンフォニーと呼ばれる3曲のうち、一番演奏頻度の少ない曲で、他の2曲が急緩急の標準型であるのに対し、この曲は緩急急の珍しい構成である。編成は釋伸司、中川敦史(Vn)、佐份利祐子(Va)、日野俊介(Vc)、南出信一(Kb)の五重奏。アンダンテの冒頭楽章はノットルノ風で、爽やかな風がさっと吹き通るかのよう。第2楽章が本来の冒頭ソナタ楽章のようで、生き生きと溼潤とした演奏がいい。時に音程があやしくなるところが惜しい。メヌエットのフィナーレは典雅な趣が醸し出される。

2曲目は《音楽の冗談》K522。演奏にホルン2本(佐藤明美、柿本奈緒子)が加わる。この曲は楽しい曲だが、演奏は注意を要する。原題のSpaß(冗談)の部分が、下手にやると下品になりかねないからである。MKJのメンバーはその点うまくやっていた。まじめくさってやっているところ



ギオルギ・バブアゼ ● ヴァイオリン *George Babadze, violine*

ジョージア(旧グルジア)・トビリシ出身。国立トビリシ音楽院卒業後、研究科を経て大学院に進み、指揮法を学ぶ。1988年より2年間バツミ市交響楽団の指揮者。90～93年ジョージア音楽協会室内管弦楽団の芸術監督及び首席指揮者。93年にイタリアへ渡り、ジョージア弦楽四重奏団のメンバーとして活躍。96年大阪シンフォニカー交響楽団のコンサートマスターとして来日。98年よりトビリシ弦楽四重奏団、アフターアワーズセッションのメンバーとして参加。2001年より関西フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスター、05年より関西シティフィルハーモニー交響楽団の常任指揮者、06年ジョージア国立歌劇場の客演指揮者、10年よりジョージア国立交響楽団、ジョージアン・シンフォニエッタ室内オーケストラ、トビリシ音楽院交響楽団の首席指揮者に就任。11年よりルーマニアのスプリング・フェスティバルに招かれ、オラデア・フィルハーモニーを指揮。これまでに阪大オペラ、堺シティオペラを指揮。現在、指揮者、及びヴァイオリン奏者として演奏活動を行う傍ら、京都市立芸術大学非常勤講師、神戸大学や京都大学の学生オーケストラのトレーナーとして後進の指導にもあたっている。



チプリアン・マリネスク ● ヴァイオリン *Ciprian Marinescu, violine*

ルーマニア・ブカレスト出身。6歳でジョルジュ・エネスク音楽高等学校に入学、16歳で同音楽学校のスポンサーのもとルーマニア各都市にてリサイタルツアーを開催。卒業後、ブカレスト国立音楽アカデミーに入学し、1990年卒業までアーモニアカルテットのメンバーとして活動。1992年ルーマニア国立オーケストラのアシスタントコンサートマスターに就任すると同時にブカレストのヴィルトゥオーゾ・オーケストラにも加わり、西欧各国を定期的に演奏ツアーに回る。1998年に居を日本に移し、大阪交響楽団、トビリシ弦楽四重奏団のメンバーとして演奏活動を行う。2004年ブカレストのコンセルティノ室内オーケストラのコンサートマスターに就任。ここ10年間では、ルーマニアの著名なオーケストラの指揮者としてデビューを果たし、2013年ブカレストのエネスク音楽祭では日本のハーモニクス室内オーケストラを率いて参加している。現在、大阪のハーモニクス室内オーケストラの指揮者兼コンサートマスターとして活躍する他、大阪、京都、東京にて室内楽やソリストとして演奏活動を展開している。また、ヴァイオリン指導にも熱心で、日本の将来のある若い才能の発掘・発展に深く貢献している。



大江浩志 ● フルート *Hiroshi Oe, flöte*

明石市出身。京都市立芸術大学を卒業後渡独。国立マンハイム音楽大学芸術家養成課程を最優秀の成績で卒業。帰国後は、ソロ、室内楽、オーケストラなどを中心に活動している。また、邦人作品や新作発表にも積極的に取り組んでいる。89、97、07年大阪にてソロリサイタル開催。97年西オーストラリア・パースの招聘により『ひょうご文化ウィーク』にて独奏。08年NHK-FM『名曲リサイタル』に出演。平成8年度《坂井時忠音楽賞》受賞。現在、大阪音楽大学、相愛大学、ムラマツフルートレッスンセンター各講師。モーツァルト室内管弦楽団首席奏者。《アンサンブル・ダンツィ大阪》及び《アンサンブル135》メンバー。伊丹シティフィルトレーナー、明石フィル演奏委員。神戸音楽家協会会員。一般社団法人日本フルート協会代議員。



石井理子 ● ハープ *Michiko Ishii, harp*

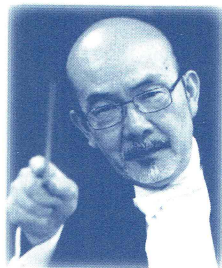
相愛高校音楽科を経て、大阪音楽大学卒業。現在、フリーのハーピストとしてソロの他、アンサンブル、オーケストラ等で演奏活動を行い、数多くの演奏会に出演。また、大阪有線放送のレコーディングにも参加している。96年俳優の江守徹氏と「志賀直哉の世界」で共演、好評を博し、以後4ヶ所で再演された。96、98年デュオリサイタル開催。2011年「ロマンティック・ハープ～石井理子と仲間たち」開催。2013年帝国ホテルチャペルコンサートに出演。2016年東京と大阪でデュオリサイタル開催。2017年4月CD「Duet」リリース。田淵順子、海川佳代子の両氏に師事。日本ハープ協会会員。

が自然のおかしみを生み出す。第1楽章ではヴァイオリンの音型やヴィオラのトリルがヘンテコであり、第2楽章のホルンのヘタクソぶりも笑える。そもそもメヌエットでマエストロ(莊重に)の指示もおかしい。トリオもヴァイオリンが流麗に進むかと思うとRの楽句が塞き止めてギクシャクする。アダージョは美しい緩徐楽章のようだが、少しずつズレていて、ヴァイオリンの大外しでとどめをさす。フィナーレは軽快に進行するが、最後にとんでもない和音が待っている。この演奏はなかなかいい曲かもしれないと思わせるところが秀逸であった。

休憩後はディヴェルティメント第17番K334。この曲はディヴェルティメントの最高傑作であり、筆者も大好きな曲だが、実演に出会うことが少ない(筆者も2、3回しかなく、前回は在阪オケで10年以上前のことである)。冒頭楽章では釋と中川のヴァイオリンが生き生きとしゃやかに動き回り、とても爽やかできれいだ。21歳のモーツァルトの成熟した感性、それでも青年らしい瑞々しさをまだ残した感性の煌きをこれほど見事に具現した音楽が他にあろうか。そう思わせてくれる演奏であった。第2楽章はモーツァルトには珍しい短調の変奏楽章で、各変奏ごと前半のみ反復して演奏した。印象に残ったのは、第4変奏でマジョーレ(長調)に変わり、ホルンの旋律とともに広い世界に羽ばたつてゆくような趣があつて、変奏全体の中でひときわ輝いていたことである。この曲で最も有名な第3楽章メヌエットでは、旋律がヴァイオリンとヴィオラのユニゾンで豊かに広がる。第4楽章アダージョは第1ヴァイオリンが協奏曲風の大活躍。高音域が次々と出てくる難曲を釋の清潔なイントネーションが見事にこなして、実に美しい。第5楽章メヌエットでは、主部後半の半音階楽句や第1トリオ中間のデリケートな旋律、第2トリオの内声の動きが面白く感じられる。終楽章ロンドは、主題も3つの挿入句も端正に彫琢されて、とてもきれいだ。美の世界が永遠に続くのではと思わせるほど。存分に楽しめた。アンコールは《音楽の冗談》のフィナーレで、リズムが弾んでとてもよかったです。本当にいい曲だと再確認させられた。

門 良一 ● 指揮 Ryoichi Kado, Dirigent

1939年大阪生まれ。1962年京都大学理学部物理学科卒業、67年同大学院終了。京都大学オーケストラには学部、大学院を通じて10年間在籍し、フルート奏者、指揮者を務め、同オーケストラの発展に多大な貢献をする。また、客演指揮者の故近衛秀麿、故朝比奈隆、故岩城宏之、故若杉 弘、故奥田道昭、秋山和慶各氏等のもとで副指揮者を務め、薫陶を受ける。70年モーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり、同楽団を日本有数のプロ室内オーケストラに育て上げた。モーツァルト、ハイドン等の古典派の作品を35人の室内オーケストラで優雅に繊細に演奏する独自のスタイルを確立している。企画力にも優れ、モーツァルトの「予約演奏会の再現」やオペラ《イドメネオ》の世界初ノーカット上演などの大きな企画を成功させている。また、世界的名手との協演も多く、ピアノのマリア=ジョアオ・ピリス、シプリアン・カツァリス、ヴァイオリンのライナー・キュッヒル、ホルンのペーター・ダム等との協演においてはソリストの絶大な信頼を得て大成功を収めている。近年は古典派だけでなく前期ロマン派やフランス音楽においても、企画、演奏両面で注目すべき成果を上げている。アマチュアの指導にも熱意を持ち、京都産業大学神山交響楽団の音楽監督・常任指揮者を創立時より務めている。モーツァルト研究者として知られ、1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにおいて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。



●NPO法人モーツァルト室内管弦楽団 Mozart-Kammerorchester Japan

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、47年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シプリアン・カツァリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を開催。また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を、15年からは〈創立45周年シリーズ〉を開始している。本年1月NPO法人となる。

《メンバー》	コンサートマスター	釋 伸司					
第1ヴァイオリン	釋 伸司	本多 智子	稲庭真理子	谷口 朋子	松本 紗希	北村 奈美	
第2ヴァイオリン	中川 敦史	黒江 郁子	田原口安代	池内 美紀	幣 晴代	清水めぐみ	
ヴィオラ	道幸 明美	佐份利祐子	三上 哲	白木原有子			
チェロ	石 豊久	中嶋 寄恵	三宅 香織	境 綾子			
コントラバス	南出 信一	北田 由美					
オーボエ	戸田めぐみ	大森 美希					
ホルン	佐藤 明美	垣本奈緒子					
インスペクター	中川 敦史		ライブラリアン	本多 智子			

